



Title	寝たきり予防講演会に出席して：看護の可能性への挑戦
Author(s)	北村, 郁子
Citation	大阪公衆衛生. 1993, 63, p. 13-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83838
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寄稿

寝たきり予防講演会に出席して

——看護の可能性への挑戦——

大阪府福祉部保健福祉政策室

北村 郁子

昨年、NHKテレビで放映された「あなたの声が聞きたい」——“植物人間”生還へのチャレンジ——を再び、ビデオで見る機会が与えられた。

当時、私の身内の者が、脳内出血をおこし意識障害がありICUに入っていた。不安な日々を送っていた一人として、このテレビを見てどんな重症の患者でも回復の可能性は残されており、決して諦めてはいけない、このような病院へ入院できたらいいな、とも考えたものであった。

今回は、病院でのケアの仕掛け人？でもある紙屋克子看護部長の講演会が計画されて、よりもっと詳細が聞きたく待遠しい思いでもあった。

ビデオは大きなスクリーンいっぱいに写し出された。

ICUの患者さんが酸素ボンベをつけての入浴、それは温熱刺激療法と呼ぶもので複数のナースが、声かけや姿勢保持も積極的に行っている姿。

食事についても、意識障害の患者さんの細かい表情も見逃すまいと話しかけながらプリンを与える場面、間もなく普通食をパクパク食べる患者さん。

昼間のベットは空っぽ、病室のなかでのマット運動、呼吸停止の患者さんへの緊急処置と家族への対応等々。

ナースから励ましの声かけ、上手くできれば歓声と拍手、患者さんとのコミュニケーションを第一にした涙と感動の一時間であった。

ナースたちの明るさ、チームワークのよさ、熱心な事例検討会、スタッフに適切な指示、助言と励ましを与える婦長。医師は一人で回診をし、ナースは看護の独自性をいかんなく発揮できる体制がある。このような当り前のことが、なかなか実行できない現実のなかで、どのようにしてケア体制が可能になったのか。

引き続いての講演の内容は、看護は基本的人権として、健康を取り戻すためのものであり、重症患者さんであっても、普通の生活ができるよう、早く障害の原因を除去すべきである。

そのためには患者さんの全体像をみ、患者の示すサインを見逃してはならない。サインを手がかりに様々なケアの実践をし、意識の回復にこぎつけていく。

社会復帰のためには、学校、職場までナースが訪れ生活調整をしている。このような看護に対する考えを、医師も理解してくれている。

テレビの放映以来、今日まで600人のひとから病院への問い合わせがあったそうだ、

札幌麻生脳神経外科病院での看護へのチャレンジが皆の心を捉えたのは事実である。理論に基づいた看護の実践を知り、心を開かせてもらった。我々も納得のいくケアにむけて、実践あるのみと感じた。

若いナースの参加が多かったが、彼女達はどんな感想を持ったのだろうか。